

---

# 君に焦がれて

癒得

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
君に焦がれて

【Nコード】  
N4317Z

【作者名】  
癒得

【あらすじ】  
好きな人に出会った。不思議な魅力を持った女の子。  
これから思い出を作っていきたい。好きだから。

## 第1話

桜の季節。入学式にはいつも桜が舞って新しい生活を彩る。ほとんどの人がそうだろう。でもそうじゃない人もやはりいる。根暗で陰湿な私みたいなヤツら。桜の彩りでさえ心の暗さは塗りつぶせない。なぜこんなにウキウキとした空気を出せるのだろう。私はそんな事を思いながら騒いでいる女子高生の集団を通り抜ける。もう友達達だよねとかそんな言葉も聞こえて来るのだけどそんなのありえない。出会ってまだたかだか数時間なんの苦楽も一緒に乗り越えていないのに。そんな友達作りの天才たちの顔を少しだけ拝むと今までより早足でその場を去る。ちよつとムツとした。

誰がどのクラスに割り当てられるのかその発表がどこかに貼り出されている筈だ。さつきからそれを探しているのだけど見当たらない。いたるところに人集りができているせいでクラスの発表を見ている集団と見分けがつかない。すぐ分かると思ったのに。

「……疲れた」

沢山の人の中にいるのは苦手だ。ツライ。どこか人のいないところはないだろうか。人がバラけるまで休めれば。

「……校舎裏」

入学式なんて晴れ舞台に陰気な裏側なんかにはいないと思う。いても同類。同じように人ゴミに疲れた人だけだ。

案の定誰もいなかった。ただ桜のせいか陰湿な感じはしない。校舎の壁にもたれかかったため息をつく。思えば入学式まで心休まる時がなかった。地元から離れた私立に入ったせいで受験も大変だった。今や念願の一人暮らしだが。楽だったのはさみしいと言つて色々くつついて来るヤツがいなかった事だ。そもそも友達がいなかったからそんな事もあるわけないが。たまに今まで話した事もないヤツが友達面してそういう類の事をしてくるらしい。本当によかつ

た。

しばらく何も考えずたたずんでいると同じく人の中から逃げて来ただろうという者が現れた。やはりいるんだなそう思いながら顔を拝んでやろうと視線を向けた。

そこにいたのは何とも言えない魅力を持つ女の子だった。見た事がない魅力。いや私は知っている魅力。何かはつきりわからないでも目が離せない。心臓が高鳴る。私はあの子が好きだ。同性だが私はいつもそう。同性愛者。ただいつもと少し違ういつもはこんなに不思議な感じはしない。こんな不思議な……同じだという感覚。伝えたいそう思った瞬間にはもう遅かった。

「あなたの事が好きです」

考えるより早くからだが動く。今まで信じられなかったけど本当にあるんだとかさつき見た友達作りの天才達の仲間入りだなとかそんな事を思った。

## 第1話（後書き）

久しぶりに連載始めますので！

## 第2話

私は恋をした……はずがあまりワクワクウキウキしない。いつもなら少しだけどういいうのもあるのに。昔ほど子供ではなくなったのかそれとも好きという感情で多い被されたべつの気持ちがそこにあるのか。

あの告白のあとすぐには返事がもらえなかった。少し考えたいと約束は今日。告白をした校舎裏。昼休みにと言っていた。本当に来てくれるだろうか。その場しのぎでそう言ったのかもしれない。いや違う。そうじゃない。そんな事を心配してるわけじゃない。いなくなってしまうんじゃないか。そんなわけのわからない不安があるんだ。自然と早足になる。早く会って安心したい。ガラにもなく必死な感じだ。

約束の場所が近づいてきて突然私の足は動きが悪くなった。考えてしまったのだ。もしいなかったら。いなくなってしまうたら。少しづつ約束の場所に近づく。それでも完全に足が止まらないのは会って安心したいという気持ちとせめぎ合ってるから。不思議なものだ名前も知らない共有した時間なんて少しもないあの子の事をこんなに考えてるなんて。

そして校舎裏の手前もう目の前の角を曲がるだけだ。歩みがとても遅くなっている。あと数歩。あの告白をした時に見えていた桜が見えてきた。あと少し。そして校舎裏にたどり着いた。

私はホッとした。少し暗い感じのする女の子がちゃんといたからだ。まだいなくなっていなかった。

「またせてすまない」

私の言葉に反応してこちらに気づく。

「いえ……どうせする事もないので」

寂しい顔をする。同じ種類の人間。

「ところで名前教えてくれないかしら、それぐらい返事をする前に

知っておきたいわ」

「そうだな、ユミだ……君の名前は……」

「名前も知らない相手に告白したの」

「……すまない」

女の子はすこしあきれた顔でこちらを見る。本当に一目惚れだった。そんな真剣な表情をして見返す。

「まあ、いいわ……私はカナエ、好きなように呼んで」

カナエが腕を組んで壁にもたれかかる。

「ところで実際に同性を好きになる人っているのね、それとも罰ゲームが何かで告白したの？」

「違う！ 本当に……一目惚れで……気持ち悪いかな？」

カナエの表情はなんで？ という風に全く変わらなかった。ホツとした。嫌われても別にいいなんて思えない。いつもはそんな事がまわらないのに。

「ところで告白の返事なんだけど」

心臓が大きく動いたような感覚だった。緊張する。断られても全くおかしくない。

「付き合ってもいいわ」

「ほ……本当に？」

「ええ……最後だし」

「え……最後……って？」

「言ってなかったかしら」

その時またあの魅力を感じた。告白の時に感じたあの。

「今年の私の誕生日が終わる時、自殺するのよ」

カナエのその時の顔はとても嬉しそうな悲しい顔で。それはとても魅力的だった。

### 第3話

あああの魅力はそういう事だったのか。私は妙に納得していた。

あれは人が死ぬ事を本気で決意した時の独特な空気。私もそれを知っている。本気で思ったけど怖くてできなかった。それをカナエにはできてしまう気がして憧れに近い物を感じたんだ。

「付き合っのやめたくなった？」

「いや、付き合いたい」

「自殺を止めてみせるってやつかしら？」

「いや……わからない」

私はカナエが好きなんだ。でも死を決意するカナエにも魅力を感じる。

「じゃあまた後で」

カナエがその場から去ろうとする。

「時間もないからさっさと進展させてほしいわ、リードしてよ」

そして私一人になった。何も言えなかった。言ってやれなかった。言いたくなかった。

教室に戻るとすぐ自分の席に直行する。基本的にいつも空気であって席にいる。おかげで誰も話しかけてこない。今日ほどそれをありがたく思った事はない。考えたい。どうすればいいのか。

放課後全ての授業が終わってクラスメイト達が帰り支度を始める。私はずっと考えていて答えが出なかった。そして気がつく教室には誰もいなかった。

「帰るか」

手早く荷物をまとめて教室を出る。そういえばカナエの連絡先とか聞いてなかった。とりあえず一緒に帰ったりしてみようと思ったのに。それで答えが出るとは思っていないけど。

下駄箱の前まで来ると私の靴いれの前に人影が見えた。

「ユミ」

人影がそんな事声を出しながらヒラヒラと手を振る。

「カナエ」

下駄箱の前で待っていたのはカナエだった。手を振ってるに顔は笑ってない。無表情で手を振るのはとても不気味な感じに見える。

「私帰るけど一緒に帰ってみるかしら？」

「私も一緒に帰るという案は考えていたんだ、ただ連絡先がわからずどうするか考えていた」

「そう……連絡先は」

そこまで言ってカナエは少し考える素振りを見せる。

「教えないでおくわ、私が死んだあと諸々面倒だし」

胸に何かが刺さったのではないか。そんな事を思っただけのあたり確認してしまう。それほどの痛みを感じた。カナエが自殺を考えている。そんな実感をしてしまう。何かの間違いじゃなく何かの聞き間違いじゃない。カナエが死ぬなんて嫌。そんな思いと自分ができなかった事をやろうとしているカナエに対しての憧れと。グチャグチャになってどうすればいいのかわからない。私はどうすれば。

「ユミ、あなたは出会ってから辛そうな顔しか見た事ないわ」

「カナエだって無表情で絶望した様な顔しかしてない」

「類は友を呼ぶね」

同類。多分私達はそれだ。同じ種類の人間。唯一違うのは勇気があるか臆病か。

「誕生日はいつなんだ？」

「教えない」

「じゃあ明日、遊園地に行かないか？」

「いいわね、いい感じだわ」

きっと誕生日は近い。早く答えを出さないと。どうしたいのか。決めた時に終わっていたら。そう思うと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4317z/>

---

君に焦がれて

2011年12月22日12時46分発行